

サピア=ウオーフの仮説について : 文化(その3)

江村, 裕文 / EMURA, Hirofumi

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2007-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002982>

サピア＝ウォーフの仮説について^①

—文化その3—

江村裕文

0 はじめに

筆者は、「文化の定義のための覚書——文化その1——」において、金沢(1992)の文化に関する言説を紹介した。そこで金沢は「文化という眼鏡を通して自分自身や他人に対する見方が規定されているのですが、誰もそれには気がつかないのです。」と書いており、筆者はこの言説について、江村(2003)で「この発想はいわゆる「サピア＝ウォーフの仮説」と呼ばれるものであるが、これについては別に稿を改めて論じたい。」と書いた^②。

また、筆者は、「日本人大学生に見られる文化的「偏見」について——文化その2——」において、筆者自身の「偏見」として、ある英語教師が「サピア＝ウォーフの仮説」があたかもそのまますべての言語学者によって承認された事実であるかのように誤解をし、その結果自らの無知をさらしているのだという指摘をした^③。

という具合に、これまで筆者は「サピア＝ウォーフの仮説」について言及することはあっても、その内容に関しては論じてこなかった。

そこで、本稿では、何らかの形で「言語と文化」なり「言語と認知」、「言語と心理」といった興味を引く話題の際に常に問題となる「サピア＝ウォーフの仮説」について、筆者なりにまとめておきたいと思う。

ただし、ここで私が論じようとしているのは、「サピア＝ウォーフの仮説」そのものをテーマにして、この仮説の内容について、例えば共時的にまた通時的に、検討しようということではない^④。さらに、昨今の「認知言語学」の知見から、この仮説を見直してみようということでもない^⑤。

本稿の目的は、80年代に「右脳・左脳」ブームを引き起こした角田理論を概観し、その上で、この学説からヒントを得ていると思われる呉善花の議論を俎上に上げて、言語学の立場から指摘できることを覚え書きの形でメモしておきたいということである。

1 サピア＝ウォーフの仮説

1. 1. 簡単な概説

まず、「サピア＝ウォーフの仮説」とはどのような内容の仮説なのだろうか。辻編 (2002) の「言語相対説 (linguistic relativism)」という項目では、

「母語によって、その話者の思考や概念のあり方が影響を受けるという仮説。言語が異なれば認識や経験の仕方も異なるとされる。言語が文化の形式を規定する、という議論のされ方もある。また、「サピア＝ウォーフの仮説」(Sapir-Whorf hypothesis) としてもほぼ同義で知られている。さらにこれを強く推し進めて、人間の思考や認識のあり方を言語が決定することを強調し「言語決定論」(linguistic determinism) と呼ぶこともある。」

と説明されている^⑥。

大堀 (2002) では、この仮説を「平均的にとらえる見方をまとめれば次のようになる。話し手の母語の言語構造は、言語から独立した思考を決定づける。」として、「この仮説の「強い」解釈と呼ばれるものは、言語が思考を全面的に決定づけるという立場である。」と説明し^②、また、「これに対し、「弱い」解釈は、言語が思考に何らかの影響を与えるという立場をとる。」と説明している^③。つまり、「サピア=ウォーフの仮説」には「強い」解釈と「弱い」解釈があるというのである。

この点に関して、池上 (1972) は、「一方に言語という項を立て、他方に思考なり行動様式、または文化という項を立て、両者の間の関係を前者の後者に対するごく弱い意味での影響の可能性の存在ととるか、前者が後者に対して「強制的な支配力」を及ぼすととるか、その二つの間には大きな違いがある。」と指摘している^④。

池上 (1972) のいう「強い説」、大堀 (2002) のいう「強い」解釈について、大堀 (2002) は、「多くの場合、それ（「強い」解釈）は議論の都合上出てきたもので、支持するものは実際にはいない」し「何より、言語が思考を全面的に決定するならば、「言語から独立した思考」を取り上げることは不可能であり、仮説として不備である。」と指摘している^⑤。

また、池上 (1972) のいう「弱い説」、大堀 (2002) のいう「弱い」解釈について、大堀 (2002) は、「これに対し、「弱い」解釈は、言語が思考に何らかの影響を与えるという立場をとる。この場合、重要なのは言語のどんな側面が、思考のどんな側面に影響するのかという点である。」と指摘している^⑥。

つまり、言語には、心理・思考・文化に対して「強い」決定力がある、という主張から、「弱い」影響力がある、という主張までの幅があるというのである。

以下では、サピアやウォーフがこのテーマについてどう述べている

のか、を紹介する。

1. 2. サピア自身の議論

まず、サピアの主著(1921)には、

例えば、私が「今朝は食事がうまかった」というような場合に、私は、何も苦しんで、肩の凝るような思索に耽っているわけではないことは明らかだ。伝えたいのは嬉しい記憶であって、それが習慣的な表現の溝にそって記号的にあらわされているにすぎない^①。

とか、そのすぐ後に、

言語が、……あらかじめ用意された道、または溝であるとすれば、どうだろう^②。

というふうに、言語が「溝」であるという表現がある。

サピアは、この「溝」を、

われわれが英語の古び切った表現の溝にあまり馴れ過ぎて、それが避けられぬもの、当然のもの、のように感じているからにすぎない^③。

とか、

英語にはそれを走らせるに必要な形態上の溝が欠けている……^④

それは英語の形態的な溝に容易にあてはまらないからだ^⑤。

といった表現があり、さらに、

言語とわれわれの「思惟の溝」とは解けぬまでに織り交ぜられていて、ある意味では、同一物である^⑥。

と、述べている。

つまり、言語には形態的な「溝」があり、その「溝」に沿って我々は表現するのであり、その言語の「溝」は「思惟の溝」でもある、というか、思考は言語の「溝」に沿って表現されるのだということを主張しているのである。

また、サピア(1929)は、

言語は「社会的実在」(social reality) に対する一つの指標である。一般に、言語が社会科学の研究者にとってきわめて重要なものであると考えられている訳ではないが、社会問題と社会の過程に関する我々のすべての思考は言語によって強く規定されていると言える。人間は客観的世界にだけ生きているのではないし、またごく普通の社会的活動の世界にだけ生きているのでもない。むしろ人間こそ、自己の社会の表現手段となった言語に大きく左右されていると言える。人間は、言語を用いずとも本質的に現実に適応するから、言語というものは、伝達や内省といった特定の諸問題を解決するための単なる偶然の手段に過ぎないと考えすることは、まったくの誤解である。つまり「現実世界」は特定集団の言語習慣の上に相当な程度まで無意識的に構築されているのである。これまでに、二つの言語が、同一の社会的現実を表現すると考えられる程、きわめて類似していると例はない。様々な社会が存在する世界は、それぞれ異質の世界である。単に別々の付箋が添付された同一世界となるものであり、単に同じ世界ではありえないのである。

と述べている^⑦。

サピア (1931) は、

言語というものは、個人にとって重要と思われるような経験のさまざまな項目を多少体系的に並べてみたものにすぎない、というような素朴なとり方がしばしばなされている。しかし、言語とは単にそれだけのものではなく、一方ではまた、1つのまとまりをなし、創造力を有する象徴体系であって、その助けを借りることなく得られた経験を指して示すというだけでなく、われわれに対して、現実に経験を規定するという働きをもつ。これは、言語というものが形式的に完全なものであり、われわれは言語から暗に期待されることを経験の分野に無意識のうちに投入してしまうからである。

と述べ、またこのすぐ後には、「言語形式というものがわれわれの外

界の見方に対して、専制的な支配権をもっている。」とまで述べている^⑧。

この主張の要点を、池上(1970)は、

サピアにとっては、言語の機能とは単に経験したことを報告するというだけでなく、われわれに対して経験の仕方を規定することである。この際の言語とは、その社会で使われる「特定の言語」、つまり、「われわれの属する共同体の言語習慣」である。これによって、われわれの「思考」は「ある特定の解釈を選択すべく前もって規定される」という形で「条件づけられている」。従って、われわれの見る「現実の世界」とは、われわれの「言語習慣」によって構成されたものであり、この過程は、大体において「無意識のうちに」行なわれると考えられる。

と、まとめている^⑨。

1.3. ウォーフ自身の議論

ウォーフ(1939)には、ウォーフが火災保険会社の仕事をしていたときのことが報告されている^①。そのころ彼は火災の発生とか爆発にまつわる事情について分析していたが、そこで言語表現によって人間の行動が影響を受けるということに気づいた。「ガソリン缶」と呼ばれているものの貯蔵所の近くでは、十分な注意が払われるのに対して、「空のガソリン缶」と呼ばれるものの貯蔵所の近くでは、喫煙を差し控えることも行われず、煙草の吸殻を投げ捨てたりして、不注意なのである。ところが、「空の」缶は、起爆性の気体を含んでいるので、一番危険なのである。「空の」という表現が「何もない」という意味に解釈され、「ガソリンは入ってない」さらに「だから安全だ」という判断につながり、不注意な行動をしてしまうというわけで、ウォーフは、これを「行動の言語的な条件づけが危険な形式に変えられる一般的な方式である。」と指摘している^②。この他にもウォーフは、自分

が体験した具体例をいくつかあげ、

この種の例はもっと数を増すことができよう。このことから、ある場面について話す時に使う言語形式からの類推によって、ある一定の型の行動が引き起こされることがしばしばあることがわかる。そのような言語形式はその場面をある程度分析、分類し、「その集団の言語習慣に基づいてほぼ無意識のうちに築かれた」世界の中で位置づけられるのである。しかも、われわれは自分たちの集団によってなされた言語的分析が現実をよく反映していると常に考えるものである^③。

と述べている。

この後の部分でウォーフ (1939) は、SAE とホービ語の数、量、周期、時制、持続・強度・傾向、思考習慣等に見られる相違について議論し^④、「われわれの行動でもホービ族の行動でも、いろいろな点で、言語的に条件づけられた小宇宙に統合されていることがわかる。」と結論づけている^⑤。

ウォーフ (1940) では、

自然論理によると、……語ること、すなわち言語の使用は、言語とは関係なく、すでに本質的に形づくられてしまったことがらを単に「表わす」だけのことと考えられる。思想とか思考と呼ばれる独立した過程があり、これは特定の言語の本質とは大体において無関係だとするのである^⑥。

と、最初に「自然論理による」議論を紹介し、次いで、

言語学者がさまざまな異なったパタンの言語を多く調査することができるようになった時、彼らの知識も広がった^⑦。

とし、その結果明らかになったこととして、

個々の言語の背景的な言語体系（つまり、その文法）は、単に考えを表明するためだけの再生の手段ではなくて、それ自身、考えを形成するものであり、個人の知的活動、すなわち、自分の得た印象

を分析したり、自分の蓄えた知識を総合したりするための指針であり、手引きであるということがわかったのである^④。

と述べている。さらに、

われわれは、母国語の規定した線にそって自然を分割する。現象世界から分離した範疇とか型は、観察者に余りにも身近かなものとして面するのでわれわれは気がつかないのである。一方、世界というものは、さまざまな印象の変転きわまりない流れとして現われ、それをわれわれの心——つまり、われわれの心の中にある言語体系というのと大体同じことであるが——が体系づけるということになるのである。われわれは自然を分割し、概念の形にまとめ上げ、現に見られるような意味を与えていく。そういうことができるのは、それをかくかくの風に体系化しようという同意にわれわれも関与しているからというのが主な理由であり、その同意はわれわれの言語社会全体で行なわれ、われわれの言語のパタンとして規定されているのである^⑤。

と指摘している。さらに、

この事実は現代の科学にとって大変重要である。なぜなら、その意味するところは、いかなる個人といえども自然を絶対的な中立的な立場から描写することができず、自分では全然そうでないと思っ
ていても、実はある種の解釈の仕方を強いられるということである^⑥。

と結論づけている。

そしてこれらを、「言語はさまざまな風に外界を分割するという事実は明白^⑦」で、「すべての概念体系が相対的なものであり、それが言語に依存しているということは明らかである」とまとめている^⑧。

また、ウォーフ(1941)では、ショーニー語やヌートカ語の例をあげて、「言語相対性という視点から見ることによって、「文が違うのは違った事件について言っているからである」と言う代わりに、「話し手の言語的な背景によって事実が異なるまとめ方をされる場合は、事

実は話し手にとって違ったものとなる。」と推論する。」という議論をしている³³。

この主張の要点を、池上(1970)は、

われわれの知覚というものは、言語に関係なく「同じ形で」人間に与えられる。しかし、経験が言語としてまとめられる際には、言語というものに「よって決まる」。それ故、言語とはわれわれの「概念を形成するもの」であり、「知的活動の指針である。この過程はわれわれの意識の「背後」において行なわれるものであるが、「絶対服従を要求する」ものである。ここから、言語的背景が違えば事実の認識の仕方も違ってくるといふ言語的な「相対性原理」が出てくる³⁴。

とまとめている。

2 角田理論について

2.1. 角田理論とは何か

ここで取り扱うのは、角田忠信著『日本人の脳 [脳の働きと東西の文化]』に述べられている議論である。角田氏はこの本の中でどのような議論をしているのか、またその議論がどういう点で「サピア=ウォーフの仮説」と関係してくるのか、簡単にその方向性を確認しておくためにも、この本についてのチラシに書かれていた推薦文を紹介したい³⁵。

「日本人と西洋人の感性の相違は左右の脳のメカニズムの違いに基づき、それは言語環境によって決定される。独創的な着想と堅実な検証により感性の領域に科学のメスを加え、多方面に新鮮な刺激を与えた角田理論の全貌を示す書。」

「すでに新聞紙上など一般的な機会にも何度か発表されて広い関心

をひいている「角田理論」の総集編——日本人の思考様式、創造性の問題などへ自由な推測をはばたかせる。」《朝日新聞》

「本書の科学的部分は純正な科学研究として高く評価さるべきものだ。」《読売新聞》

「こうした発見は、実は想像もできないほどの広い分野で、日本人のこれまでの活動のパターンを説明することにつながる。」《日本経済新聞》

「広範な読者に、各人各様の自己体験や直感にもとづく共鳴や種々の示唆を与える。」《東京新聞》

「ベンダサンの『日本人とユダヤ人』以来のユニークな日本人論。」《日刊ゲンダイ》

「日本および日本文化の特殊性を最も基本的なところからとらえたのがこの本。」《文芸春秋》

「大変に衝撃的な本である。」《放送文化》

「とくに日本文化の生理的基礎というべき、日本人だけに特異な脳の働きの研究が興味深い。」《週間読売》

「これはたいへん知的刺激に富んだ稀にみる発見の書である。」《週間朝日》

「外人にはコオロギの声も雑音！？脳の働きにみる東西文化論。」《週間現代》

つまり、日本人と西洋人（この区別自体がある種の怪しさをすでに内在しているが）の感性や思考様式、ひいては文化の違いは、日本語を身につけた日本人の脳と、西洋語を身につけた西洋人の脳の違いであり、その意味で、この説が正しいとすれば、「サピア＝ウォーフの仮説」の強い説、つまり「言語決定説」が正しいことを証明したことになるわけである。

2.2. 『日本人の脳』が述べていること

2.2.1. きっかけ

角田氏は、日本語を身につけた日本人の脳が、「異質の言語処理機構」^②を持っており、西洋人とは違った音の感覚を持ち、「これがひいては日本人の精神構造にも影響を与えるという可能性」^③について調べてみようと思ったきっかけについて次のように書いている^④。

1973年の9月の終わりごろのことであった。診察を終ってふと聞いた、こおろぎの音は非常に情緒的に美しく聴えた。都心のなかにあってもこおろぎの音が聞かれることに喜びさえも感じた。さて、その夜に期限の迫った音響学会の音声研究会に提出する論文を書き始めようとしたが、どうにもよい構想が浮ばなかった。二時間近くもあれこれと頑張ってもとても手がつけられない。昼間は冷房のつけっ放しであったから、夜は窓を一杯に開け放しておいたのがいけなかったのだろうか、頭が働かないのはどうもこおろぎの音が耳について考えがまとまらないせいではないかと気になりだした。つい数時間前にはあれほど懐しく聞かれた虫の音にいまこれほど論理的作業の邪魔をされるものかと不思議でならなかった。(中略)このような偶然の発想から生れた虫の音を日本人に応用してみると、これが母音と同じ側の言語脳が優位になってびっくりした。同じ虫の音を西洋人に応用してみると驚いたことに今度は判っきりと劣位脳優位になってしまうことがわかった。こうして虫の音の優位性が日本人と西洋人とで違うことが見つかった途端に、私はいままで日本人論でいわれてきた様々な特徴の原点がここにあるなど直感的に捉えられたような気がした。日本人が秋の虫の音に季節感や安らぎ、またものあわれを感じるということは日本人に特徴的な音の処理機構に根ざすのではなからうか？大変日本人的な発想法だといえようが、これにヒントを得て更に多くの自然音を検査音に加えることによって、日本語の母音の脳の識別機構の特異性が日本人の形成

に影響しているに違いないという考えをもつに至った。

2.2.2. 実験のやり方および結果

脳における音の処理を検証するために、角田は「大脳半球優位性テスト」という電鍵打叩 (key tapping) による遅延側音効果を利用した優位性テストを開発した^④。

実験方法は、以下の通りである^⑤。

被験者には予め利手の指先で細かく一定のパターン、例えば、3-3 (・・・・・・)、4-4 (・・・・・・・・・)、4-2 (・・・・・・・・・) などを連続打叩することを練習させておき、数を数えなくても無意識に打叩できる状態にしておく。被験者の一発ずつの打叩に応じて、リレーが働き、第一チャンネルの電子スイッチを駆動させる。(中略) これは一打叩ごとに持続時間50乃至75ミリ秒の短音として右耳に伝えられる。(中略) 一方、第二チャンネルには途中に遅延回路があり、打叩運動よりも0.2秒遅れた音を左耳に導く。若し遅延音だけを聴き乍ら一定パターン動作をくり返すと、DAF (Delayed Auditory Feedback) 効果によって打叩パターンやリズムの誤り、打叩圧力の増大がおこり、これらが記録計で観察される。

この実験というのは、「即ちモニターし易い音とそれを妨害する音を両耳に同時に与えるという左右の耳の競合状態で、どちらの側がDAF効果に鋭敏であるかを検出する方法である」^⑥。

この優位性テストに用いた検査音の種類は以下の通りである^⑦。

- 1 言語音として、母音・子音・合成母音
- 2 人声として、言語音以外の感情音すなわち、ハミング・乳児の泣声・笑い声・鼾・嘆声など。
- 3 動物の啼き声として、えんまこおろぎ・鈴虫・きりぎりす・蝉・蛙・猫・犬・牛・雀・小鳥の合唱・鶏・ライオンなど。

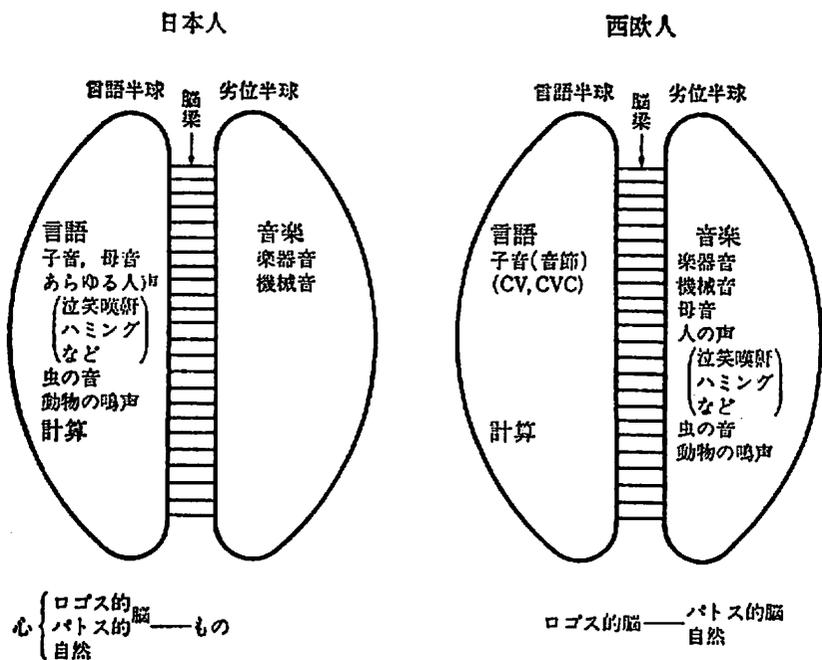
4 機械音として、1キロヘルツ純音・オーケストラによるA音の合奏・梵鐘・教会の鐘・汽笛・ヘリコプター音など。

実験は、「正確を期するため、一名の被験者については最低五回以上、一回毎に日を変えてテストを行い、同一の検査音については常に同じ傾向を示したものをとった」^⑨。

この実験を日本人および西洋人に行った結果、角田氏の著書の中では各個人別のデータが提示されているが^⑩、ここでは最終的な結論だけを紹介する^⑪。

「日本人と西洋人の自然音処理機構の差について」で、角田氏は、日本人と西洋人の言語音・自然音・人声・機械音の大脳半球優位性パターンを要約し、図1にまとめている。

図1



この図について、角田氏は、

西洋語を母国語とする人々では言語半球は音節を基本単位として言語・論理を組立てるが、情緒に関係すると考えられる人声（泣・笑・嘆・母音）は非言語として論理的な脳からは区別される。（中略）我々日本人にとって情緒を伴って聴かれる虫の音などの動物の啼声も明瞭に、機械音・ノイズとして論理的な脳からは区別される。このような左右の脳機能の分担は西洋哲学で認識過程をロゴス的（理性的——言語・計算）とパトス的（感性的）認知とに分ける考え方と一致する。これと対照的に日本人にみられる特徴はロゴスとパトス的な認知機構が言語半球に共存し、然も同程度の優位性の偏移量（dB）をもっていることにある^⑧。

と説明し、さらに、

複合音の認知機構の差を直ちに日本人と西洋人との精神構造の差に結びつけるのは甚だ飛躍した考えと受け取られたかもしれない。しかし感性的な音が無意識のうちに論理・知的な言語半球にとりこまれて音認識をする日本人と、無意識のうちに言語半球から閉め出されて音認識をする西洋人の感覚は明らかに異質のものであり、この差が精神構造にも影響を与える可能性は十分に考慮する価値があると考える^⑨。

と主張している。また、

日本人にみられる脳の受容機構の特質は、日本人及び日本文化にみられる自然性、情緒性、論理のあいまいさ、また人間関係においてしばしば義理人情が論理に優先することなどの特徴と合致する。西洋人は日本人に較べて論理的であり、感性よりも論理を重んじる態度や自然と対決する姿勢は脳の受容パターンによって説明できそうである^⑩。

と、言語による脳の機構の決定の仕方が、文化のそのものを決定づけているという可能性について示唆している。

2.3. 評価

この、言語によって脳の機能が決定されるという角田理論に対するいくつかの評価の声を、以下において紹介する。

民族音楽学者の小泉文夫氏は、以下のように述べている⁵⁵。

角田さんのご研究のおかげで、われわれが漠然と感じていたこと、そして実際のデータでもって、体の中のメカニズムにまで音感の違いというものがあると科学的に実証されたことは、非常に感動的でした。

ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹は、以下のように述べている⁵⁶。

近来こんなおもしろい話を聞いたことがない。思いあたることが多い。(中略) そういう大きな違いを日本人は、生まれてから後、早い時期にすでに大脳のなかにもってしまったとしたら、それを生かして特徴を発揮するというのが、つまり独創的になるということです。きょうはたいへんいいことを教えていただいたと思うのです。

ドイツ文学者の新井靖一氏は、以下のように述べている⁵⁷。

日本人と西欧人の精神構造の差異が左右脳の使い方の差異に基づいているという驚くべき事実を、虫の音といったようなごく日常的現象の観察から導き出している点に、創見にみちた本書の魅力がある。

旧約聖書学の関根正雄氏は、以下のように述べている⁵⁸。

日本人の問題を考える上での示唆——例えば内村と武士道の問題——を与えられただけでなく、西洋器楽への興味が復活し、モーツァルトなどをカセットで毎日少時間聞き、1962年にバーゼルで求めたバルト「ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト」を新しい興味をもって再読した。

2.4. 批判

ここでは「日本人の言語と感性」と題された、安部公房氏と西江雅之氏の対談のなかでの議論を紹介する。

西江氏は、「一般的に考えて角田氏の実験のやりかたと、結論の出しかたの両方で、ちょっと腑に落ちない所がある」⁸⁾と述べ、これに対して、安部氏は、「実験のねらいは面白かったし、納得もいくんです。ただ、そこからの帰納のしかたにすこし問題がある」と答えている⁹⁾。

これに続いて、西江氏は、

まず実験についておかしいと思ったのは、音の知覚の実験と意味の知覚の実験が混同されている点だと思うのです。言語というものの中に見られるものすごい数の母音の中から、日本人にはわざわざ日本語の母音を選んで聴かせている。ところが、これがまずいと思うのは、日本語にはイロハとか、アイウエオ・カキクケコといった誰でも知っている言葉の音声表があって、その中のア・イ・ウ・エ・オと母音の [a, i, u, e, o] がほぼ一致している。即ち、[a] という音を聞いたら、それは言葉のアとして受けとるのは当然ではないでしょうか。ところが、実験に使われている外国人の母国語には日本語のような音声表はない。アルファベットという形でしかない。したがって、言語の中に見られる母音の一つだけぼつんと取り出されて聞かされても、それが言語として意味を持つことがない。例えば、フランス人に平均な調子の [a] という音を聞かせれば右側が問題になるが、アー・ベー・セーのアーといって音の調子もアー・ベー・セーのアーのように発音して聞かせれば、左側が問題になるのではないのでしょうか。それから、あの実験では聞えるところからはじまっているのですね。これは、そのまま文化論に持ちこめないところがある¹⁰⁾。

と、実験のはじめの部分のやり方について批判している。

さらに西江氏と安部氏は、

西江：実験にはじめから目鼻がつくところがある。たとえば意味の問題。言語といたら意味がかならず出てきますが、意味というのは聞くことができない。聞いたものから意味をとることはできるけれど。

安部：構造化しないとね。

西江：右と左といっても、どちらの脳も音を聞いているわけで、問題はその音を言語化しているか、していないかでしょう。言語音は左だけで、雑音は右だけで聞いているというのではないわけですね。

安部：もちろん聞いていますね。問題は言語化機能がどっちかということになってくる。

西江：そこがあ論文ではどうも思うんですよ。

と、角田氏のいう結論についても異議を述べている²⁾。

2.5. 角田理論のまとめ

日本語という言語が身につくことによって、日本語母語話者、つまり（一般の）日本人は、日本語以外の言語を身につけた人とは異なった、左右の脳の機能を示す、という角田理論は、「2.1. 角田理論とは何か」や「2.3. 評価」であげたように、各界に反響を呼び起こした。が、「2.4. 批判」であげた西江氏を除くと、言語学の分野からは積極的な意見が聞かれず、この20年間、事態を静観し続けている。というよりも、日本のいわゆる言語学者たちには、角田理論を「サピア=ウォーフの仮説」と結びつけて考えるという発想がなかったというのが真相ではあるまいか。

もし日本文化の特殊性が、脳レベルの生理現象として実証されるほどのものだとしたら、外国映画でも翻訳小説でも、けっきょく日本的誤解をしているにすぎないことになる。いや、その誤解は永遠に自覚できないのだから、論理的には誤解にさえなりえない。芝居を書くにしても、こおろぎや鈴虫、蛙などの声で生理的に侵略され

てしまった情緒的言語が日本人の宿命なら、これはもうじたばたしたって始まらないことになってしまうからね²⁸。

という安部氏の危惧が事実か否か、ことは角田理論が正しいかどうかということとともに、「サピア=ウォーフの仮説」の強い説、つまり「言語決定説」が正しいかどうかに関係してくるわけである。

3 呉善花氏の議論について

3.1. 呉善花『日本人を冒険する あいまいさのミステリー』の内容

ここで取り扱うのは、呉善花著『日本人を冒険する』に述べられている議論である。この著作のサブタイトルに「あいまいさのミステリー」とあるように、ここで呉氏が指摘したかったことは、「日本人のあいまいさ」である。

呉氏はこの本の中で、「日本人には他の外国人にはない「特異性」がある」と述べ^①、その一つとして、日本人の「あいまい性」をあげ^②、例として、食事に誘って「なにを食べますか」と聞いて、「なんでもいいです」という答えが返ってくる場合、を取り上げ、

他者への気づかいからはじまり、その気づかいをだんだんとゆるめていって、できるだけこちらがすすめたいものと相手が食べたいものとの一致点を探そうとする。これが日本人のやり方です。と述べている^③。

また、「私」か「公」かという問題を取り上げ^④、「私の大事」と「公の大事」のいずれを優先するかは、ケースバイケースであると考えている日本人が大部分のよう^⑤で、

韓国では公と家族の大事がぶつかった場合、家族をとるのが善です。価値の原則がそうになっていますから、それは疑うことのない信念のようなものです。(中略)ところが日本人の場合は、そういう

価値の原則をおこうとはせず、時と場合で判断が異なるのです。あるいは、原則をおいても、原則を曲げることはよくあるのです。ですから、ある人がある場合に公をとった、ある人がある場合に私をとった、いずれもその人なりの自由な選択であればよいのだと、そういうことになります。

と述べている^⑥。

また、

日本人には、「永遠に不変なものはない」という強い意識があるように思います^⑦。

とか、

日本人の基本にあるのは、なにか自然主義的なものだと思います。この世の中に永遠に不変なものは存在しないという、自然な事実に重きをおいています。そこからすれば、善悪も正邪も自分の信念も、不変なものではないのだと、そう考えられているのではないのでしょうか。そこでは、いくら価値基準を立てても、それが絶対的な基準になることはありません^⑧。

とも述べている。

さらにまた、人間関係について、

欧米、中国、韓国などの社会では、いったん対立してしまったら、とことんまで対立を深めることになりますから、お互いにできるだけはやく緊張を解いて、敵意のないことを見せ合い、リラックスしたかたちをとることが必要となります。それに対して日本の社会では、最初から他者への安心がありますから、そのままでは相互依存の甘えた関係になりがちです。そこで、逆に距離をとり、一線を引き、緊張から入っていくやり方をとることになるわけです^⑨。

と説明し、

ヨーロッパ人の自己主張は、相手との関係のなかでいかに自己を主張するかという自己主張なのですが、韓国人の場合は他者はどう

であれ自分は、という相手を無視した主張を自己主張と考える傾向が強く見られます。

が、それに対して、

日本人の場合は、いかに自己を主張できるかよりも、いかに自己を留保できるかを重視します。こうした重点のおき方が、自己主張が弱いという印象となって表れているのだと思います。

と述べている^⑧。

こうした日本人の傾向、つまり外国人からみて「あいまい性」としてみられるような傾向を、呉氏は、日本人の「受け身志向の性格」と呼んでいるが^⑨、この日本人の資質の原因を、日本人の脳の特質に求めている。

そこで引用されるのが、角田理論というわけである。

呉氏は、

角田忠信氏の研究によれば、日本人は自然の音や母音を言語脳(左脳) 優位の状態で聴いており、欧米人などはそれを非言語脳(右脳) 優位の状態で聴いていることが、実験的に確認されています^⑩。

と書き、さらに、

私はこの事実のなかに、「日本人とはなにか」の答えが濃密に圧縮されて存在しているように思えてなりません^⑪。

と書いている。つまり、

日本人は、自然の音をあたかも人間の言葉であるかのように受け止めている、ということは確かなこと^⑫

であり、

考えられることは、日本語を環境とする日本文化では、古い時代に自然を人(神)のように見なした意識のあり方が、言葉のシステムや慣習が保存装置となって、延々と消えずに残ってきたのではないか、ということです^⑬。

気も遠くなるような過去の時代での自然意識が、なんらかのかた

ちで日本人の心のなかに保存されている、そう考えるしかありません³⁶。

「もののあわれ」「わび」「さび」の美意識に共通するのは、完成された生命の美ではなく未完成な生命の美だという言い方ができるように思います。豊穡なる生命よりは衰えた生命へ、誕生した生命よりは誕生前の未熟な生命へという美意識の流れです³⁷。

すべての自然が生々流転を続けるという仏教的な無常観と、あらゆる自然物や自然現象を「人と同じように魂を宿すもの」として同じにとらえる「前アジア的世界」の感性が、みごとに結びついているのです³⁸。

ということになる。

結論的に言えば、呉氏の主張によれば、日本語を母語として身につけた人間は、自然の音も言語脳で処理するという、特別な脳の所有者として、「もののあわれ」「わび」「さび」といった表現で示される、他の言語を身につけた人間にはなんら把握できないような自然との一体感とでも言える感性を持っており、そこから日本的な「あいまい性」が生じてくるのであるが、それこそが「前アジア的」感性である、ということになる。

3.2. 呉善花氏の議論の問題点

呉善花氏は、「ポリネシア語族が日本人と同じ脳の働きを示している」と紹介している³⁹。ポリネシア語と日本語の母音認知機構の類似性については、角田(1978)で述べられている⁴⁰。が、では、ポリネシア人も日本人と同じような「前アジア的」感性、つまり日本人が持っているような、自然との一体感という感性を持っているということであり、その結果、彼らの社会の人間関係にも日本人のそのように「あいまい性」があり、また、彼らの文化の中に、日本語で「もののあわれ」「わび」「さび」といった表現で示される、何らかの作品なり活動

が見られるというのであろうか。日本語の文芸として世界的に知られている「俳句」のような文芸芸術が見出せるのであろうか。

脳による「音声」の認識の異同が、直接に「音—芸術」、たとえば「音楽」に関する感性に結びついているのであれば、オーストリア人が聴いているモーツアルトは、日本人が聴いているモーツアルトとは、まったく異なるモノであることになるが、本当にそういうことなのだろうか。たとえばウィーン・フィルの演奏するウィーンナー・ワルツの三拍子の独特のリズムを、日本人はまったく感じ取れなかったり、聴き取れないというのであろうか。もちろん、テクニックが充分でないために、あのリズムを再現するのが困難であるということはあるだろうが²⁹。

身につけた言語によって、脳の仕組みが異なってしまう、西洋的な感性の脳には、日本的な感性が理解できず、日本的な感性の脳には、西欧的な感性が理解できなかつたら、彼らにとっては、日本語はいくら訓練しても学習は不可能な言語ということになり、我々日本語話者にとっては、彼らの言語、英語・フランス語・ドイツ語・中国語・朝鮮語等々はいくら訓練しても学習は不可能な言語ということになるが、そういうことなのだろうか。

また、この議論は、日本人がただの人類の一民族であるのではなく、他の民族とは異なった独自性を持った、特別な民族であると主張したい人々に、格好の話題を提供することになりかねないという危険をはらんでいる。

4 まとめにかえて

「サピア=ウォーフの仮説」の「強い仮説」は、一般に、ある言語が身についたら、その人の思考回路、つまり思考方法や思考様式が、

その身についた言語によって決定されてしまう、という考え方が中心にある仮説である。この仮説によれば、思想の違いや文化の違いも、言語の違いに還元して説明できるため、言語・文化・思考・心理等に関心のある人々によって、かなり説得力のある仮説として考えられてきた。

その結果、この言語と文化・思考・心理等との間に密接な関係があるという仮説は、本論で批判的に取り上げたように、手軽にさまざまな民族を類型化したり、文化を類型化するという危険な道具として利用されたりすることがあった。

しかし、ここで論じたのは、この仮説がここで述べたような内容のままでは到底成り立たないということであるが、それとは別に「認知言語学」という新しい観点からは、言語と文化・思考・心理等との関係は、かなり深いものであるとも言える。

本稿を準備している段階で翻訳が出た、トマセロの『心とことばの起源を探る』には、

少なくともサピアとウォーフ以来、しかし実はヘルダーとフンボルト以来、言語的コミュニケーションが認知に与える影響は哲学者、心理学者、言語学者が非常に興味をいだく話題であり続けてきた。ほぼすべての理論家の関心の焦点は、ある特定の言語を習得することによって人間が世界を概念化する方法がいかなる影響を受けるか——「言語決定論」の仮説——にあった。最近の研究によると、特定の言語が非言語的な認知に特定の仕方で影響を与えるという「強い」形であれ、特定の言語を習得し使用すると事態の特定の側面に注目するようになる——いわゆる話すための思考——という「弱い」形であれ、この仮説は何らかの形ではほぼ確実に正しいのではないかと思われる^④。

という表現があり、このテーマが、これからもさらに人間の本質に迫るための議論の切り口であり続けていることがわかる。

注

- ① 「サピア=ウォーフの仮説」については、サピアやウォーフ自身の著作以外に、ベン(1972)の他、まず言語学概説の類では、キャロル(1964)の「第七章 言語と認知」中の「言語相対性仮説(The linguistic-relativity hypothesis)」の部分、築島(1971)の「第七章 ワーフの学説をめぐって」、クーバー(1973)の「第五章 言語と文化」、滝田編(1975)中の吉田禎吾「言語・観念・シンボル」の「4 言語と世界観」の部分、中島・外池編著(1994)の「16 ことばと社会・文化」中の「《言語相対性》」および「《角田説》」の部分、児玉(1998)の「第七章 認知と言語と文化」中の「5 言語相対論」の部分、郡司・坂本(1999)の「3 言語学におけるデータ」中の「3.3 データ収集の問題点」の部分等、次に、認知言語学関連のものでは、高野(1994)の「1-4 思考に関連のある研究」中の「(d) 文化と思考」の部分、大津編(1995)の「第12章 言語と思考」中の「12.1 言語相対性仮説」の部分、辻編(2001)中の土屋俊「1 言語と認知の哲学的諸問題の概略と今後」の部分、酒井(2002)の「第三章 モジュール仮説」中の「サピアとウォーフの仮説」の部分、辻編(2002)の「言語相対説(linguistic relativism)」の項目、大堀(2002)の「第11章 言語と思考」中の最初の部分、松本編(2003)の「第6章 意味の普遍性と相対性」中の「はじめに」の部分等に、言及・解説がある。
- ② 江村(2003) p.119, p.122
- ③ 江村(2005) pp.52-53
- ④ 池上(1978, 1993a)は、「『サピア=ウォーフの仮説』とよく似た考え方は、ヨーロッパ、特にドイツを中心とした幾人かの学者にも見られる。これは Humboldt, Weisgerber を中心人物とする一つの系列であるが、その直接の源泉としては J. G. Herder (1744-1803) あたりに遡ることができよう。」と書き、この系列に関して解説している。
- ⑤ 池上(1993b)は、「『サピア=ウォーフの仮説』に漸く正当な評価を与えうる条件が整ってきたのは、このほんの数年内のことである。「認知言語学」(cognitive linguistics)という名称で代表される言語学の新しい流れの中で、言語学の対象である「言語」を伝統的な試みにおけるように完全に自立した体系としてではなく、人間の「認知」(cognition)の営みと深い関わりを持つ存在として認識する視点から捉え直してみようという志向性が顕著になってきた——そういう雰囲気の中のことである。」と書いている (p.322)。

1. 1. の注

- ① 辻編 (2002) p.70
- ② 大堀 (2002) pp.212-213
- ③ ibid. p.213
- ④ 池上 (1972) p.10
- ⑤ 大堀 (2002) p.213
- ⑥ ibid. p.213

1. 2. の注

- ① サビア (1921) 泉井訳 (1957) p.11
- ② ibid. p.12
- ③ ibid. p.87
- ④ ibid. p.102
- ⑤ ibid. p.113
- ⑥ ibid. p.220
- ⑦ サビア (1929) 平林訳 (1973) p.159
- ⑧ サビア (1931) 池上訳 (1970) p.4
- ⑨ 池上 (1970) p.249

1. 3. の注

- ① ウォーフ (1939) pp.66-67
- ② ibid. p.67
- ③ ibid. p.69
- ④ ibid. pp.72-84
- ⑤ ibid. p.84
- ⑥ ウォーフ (1940) pp.103-104
- ⑦ ibid. p.110
- ⑧ ibid. p.110
- ⑨ ibid. p.110
- ⑩ ibid. p.111
- ⑪ ibid. p.113
- ⑫ ibid. p.113
- ⑬ ウォーフ (1941) p.123
- ⑭ 池上 (1970) pp.250-251

2の注

- ① 大修館書店 (1978)
- ② 角田 (1978) p.71
- ③ ibid. p.71
- ④ ibid. pp.71-72
- ⑤ ibid. p.51
- ⑥ ibid. pp.52-53
- ⑦ ibid. p.53
- ⑧ ibid. p.73
- ⑨ ibid. p.74
- ⑩ ibid. pp.74-78
- ⑪ ibid. p.84
- ⑫ ibid. pp.83-84
- ⑬ ibid. p.85
- ⑭ ibid. p.85
- ⑮ 角田・小泉 (1977) p.10
- ⑯ 角田 (1992) pp.94-96
- ⑰ 「1978年読書アンケート」 p.25
- ⑱ ibid. p.20 なお、小泉・山崎 (1981) にも、角田理論に関する言及がある。
- ⑲ 安部・西江 (1974) p.70
- ⑳ ibid. p.71
- ㉑ ibid. p.71
- ㉒ ibid. p.71
- ㉓ ibid. p.71

3の注

- ① 呉 (1978) pp.8-14
- ② ibid. pp.26-30
- ③ ibid. pp.30-31
- ④ ibid. 43-45
- ⑤ ibid. p.44
- ⑥ ibid. p.45
- ⑦ ibid. p.49
- ⑧ ibid. p.51

- ⑨ ibid. p.61
- ⑩ ibid. p.71
- ⑪ ibid. pp.77-126
- ⑫ ibid. pp.128-129
- ⑬ ibid. p.130
- ⑭ ibid. p.131
- ⑮ ibid. p.133
- ⑯ ibid. p.134
- ⑰ ibid. p.139
- ⑱ ibid. p.139
- ⑲ ibid. p.129, p.145
- ⑳ 角田 (1978) pp.291-320
- ㉑ ここで思い出すのは、指揮者の小澤征爾が、自分の音楽活動について、彼の師、斎藤秀雄が提唱する「音楽文法」の実験であるといっていることである。ここで問題になっているのは、日本人にも西洋音楽がマスターできるのか、という、極めて本稿と関係が深いテーマである。

4の注

- ① トマセロ (1999) p.219

文 献

- 阿部公房・西江雅之 (1974) 「日本人の言語と感性」『芸術生活』第 27 巻第 11 号
通巻第 303 号 芸術生活社 pp.70-78
- 池上嘉彦 (1970) 「解説」 E. サビア・B. L. ウォーフ他著池上嘉彦訳 (1970) 『文化人類学と言語学』弘文堂 pp.247-260
- 池上嘉彦 (1972) 「『サビア＝ウォーフの仮説』の「強い説」と「弱い説」」『英語文学世界』(9) pp.10-13
- 池上嘉彦 (1978) 「訳者解説」 J. B. Carroll 編池上嘉彦訳 (1956) B. L. ウォーフ『言語・思考・現実』弘文堂 pp.215-229 (講談社学術文庫 (1993a) pp.297-320)
- 池上嘉彦 (1993b) 「学術文庫版のための訳者解説追補」 J. B. Carroll 編 (1956) B. L. ウォーフ『言語・思考・現実』講談社学術文庫 pp.321-338
- ウォーフ B. L. (1939) 「The Relation of Habitual Thought and Behavior to

- Language」池上嘉彦訳(1978)「習慣的な思考および行動と言語との関係」J. B. Carroll 編(1956)『言語・思考・現実』弘文堂 pp.65-102
- ウォーフ B. L. (1940)「Science and Linguistics」池上嘉彦訳(1978)「科学と言語学」J. B. Carroll 編(1956)『言語・思考・現実』弘文堂 pp.103-119
- ウォーフ B. L. (1941)「Languages and Logic」池上嘉彦訳(1978)「言語と論理」J. B. Carroll 編(1956)『言語・思考・現実』弘文堂 pp.121-137
- 江村裕文(2003)「文化の定義のための覚書——文化その1——」法政大学国際文化学部『異文化』第4号 pp.112-123
- 江村裕文(2005)「日本人大学生に見られる文化的「偏見」について——文化その2——」法政大学国際文化学部『異文化』第6号 pp.27-58
- 呉 善花(1997)『日本人を冒険する あいまいさのミステリー』三交社
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 大津由紀雄編(1995)『認知心理学3 言語』東京大学出版会
- 金沢吉展(1992)『異文化とつき合うための心理学』誠信書房
- キャロル J. B.(1964)『Language and Thought』詫摩武俊訳(1972)『言語と思考』岩波書店
- クーパー D. E.(1973)『Philosophy and the Nature of Language』大出晃・服部裕幸訳(1976)『ことばの探究』紀伊國屋書店
- 郡司隆男・坂本 勉(1999)『現代言語学入門① 言語学の方法』岩波書店
- 小泉文夫・山崎正和(1981)『日本人と音 上・下』【本】(通巻62号・63号) 講談社
- 児玉徳美(1998)『言語理論と言語論』くろしお出版
- 酒井那嘉(2002)『言語の脳科学』中公新書
- サビア E.(1921)『Language——An Introduction to the Study of Speech』泉井久之助訳(1957)『言語——ことばの研究』紀伊國屋書店
- サビア E.(1929)「The Status of Linguistics as a Science」『Language』5 池上嘉彦訳(1970)「I 科学としての言語学の地位」『文化人類学と言語学』弘文堂 pp.1-3 平林幹郎訳(1973) マンデルバウム編(1949)『エドワード・サビア 言語・文化・パーソナリティ論選集』北星堂書店 pp.156-165
- サビア E.(1931)「Conceptual Categories of Primitive People」『Science』74 池上嘉彦訳(1970)「II 原始言語における概念範疇」『文化人類学と言語学』弘文堂 pp.4-5
- サビア E.(1949) D. G. マンデルバウム編『エドワード・サビア 言語・文化・パーソナリティ論選集』平林幹郎訳(1973)北星堂書店

- 「1978年読書アンケート」(1979)『みすず225』みすず書房
大修館書店(1978)「言語関係新刊案内'78.6」
高野陽太郎(1994)「第一章 思考の心理学」岩波講座認知科学8「思考」岩波書店 pp.1-68
滝田文彦編(1975)『言語・人間・文化』日本放送出版協会
築島謙三(1971)『ことばの本性』法政大学出版局
辻 幸夫編(2001)『ことばの認知科学事典』大修館書店
辻 幸夫編(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社
角田忠信(1978)『日本人の脳』大修館書店
角田忠信(1992)『右脳と左脳』小学館ライブラリー
角田忠信・小泉文夫(1977)「母音文化と子音文化」『人と国土』通巻第12号
国土庁 pp.10-19
トマセロ M.(1999)『The Cultural Origins of Human Cognition』大堀舜夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓訳(2006)『心とことばの起源を探る』勁草書房
中島平三・外山滋生編著(1994)『言語学への招待』大修館書店
ベン J.(1972)『Linguistic Relativity versus Innate Ideas』有馬道子訳(1980)『言語の相対性について』大修館書店
松本 曜編(2003)『シリーズ認知言語学入門第3巻 認知意味論』大修館書店